

U.A.カザールとコレクション

土井久美子

はじめに

- 1 U.A.カザールについて
 - (1) 経歴
 - (2) コレクションの形成
 - (3) 漆工、民俗学に関する研究
- 2 コレクションの概要と特色
 - (1) 根付・印籠など蒔絵装身具
 - (2) 香合など蒔絵香道具
 - (3) 蒔絵朱杯など蒔絵飲食器
 - (4) 蒔絵文房具
 - (5) 婚礼調度
 - (6) 犀角・彫漆・螺鈿—中国・朝鮮半島・琉球の工芸
- 3 欧米の蒔絵コレクション
 - (1) カザールの著作から
 - (2) 蔵書からみえるもの
 - (3) 欧米と日本—蒔絵コレクションの違い

おわりに

はじめに

大阪市立美術館はスイス人故ウーゴ・アルフォンス・カザール (Ugo Alfons Casal以後カザールと略す) が蒐集した漆工を中心としたコレクションを収蔵している。⁽¹⁾ 印籠・根付・煙草入・煙管筒・櫛・笄・簪などの装身具、硯箱・料紙箱・文台・文箱などの文房具、香合・伽羅箱などの香道具、提重・杯・菓子器などの飲食器、大名家の息女の婚礼に際して揃えられた蒔絵調度類などからなり、その総数は3409件、4333点に及ぶ。象牙彫・木彫の根付、中国製の犀角の杯・彫漆・螺鈿などの器物も含まれるが、大半は近世から近代にかけて日本で作られた漆器、主として蒔絵である。⁽²⁾

コレクションには、多彩な図様を精緻な蒔絵技法で表わした江戸後期から明治期にかけて印籠、根付などの装身具をはじめ、香合や杯などの小品が多い。19世紀の後半、空前の日本美術ブームが欧米で起こり、江戸後期の漆器の多くは海外に流失した。そのためカザールコレクションは国内に残る貴重な蒐集となっている。大阪市立美術館が作品取得を開始した当初、コレクションに付随する資料は、青焼きコピーによる5,370件の簡単な作品リストだけであり、カザールの経歴や研究については数冊の本など、若干の資料が含まれるのみだった。しかしその後関連資料を整理する機会があり、肉筆原稿・リスト・写真などを見いだすことができた。

本稿では新たな資料を用いながら、カザールとそのコレクションについて概観し、大正から昭和初期にかけての漆器コレクターであったカザールが日本の蒔絵に関するどのような情報をどこから得ていたのか、そしてそれがコレクション形成にどのように影響したのか、また当時の日本人と欧米人が持っていた蒔絵に関する情報の差、それを反映した双方のコレクションの違いなどについて考察する。

1 U.A.カザールについて

(1) カザールの経歴

カザールは(1888~1964)はスイスの古い家系に繋がるアンドレア・カザールの長男としてイタリアのフィレンツェで1888年8月15日に生まれた。[図1]ローマのドイツ学校を経て、1905年スイス、ヌーシャテルの商業高校(Ecole de Commerce)を卒業。1906年から1909年までドイツのアンハルト州バンベルクでソルベイ社に勤務した後、1909年にスイスのチューリッヒ近郊ウインタートゥールにあるフォルカート・ブラザーズ社に移り、そこからインドのボンベイに派遣された。そして1912年1月、同社の大阪支社に赴任した。1916年には同社から転任離日を告げられ退社、1916年から1918年までの間横浜のナポーツ社、1918年から1920年までの間ジョージ H. マックファデン&ブラザーズ社大阪支社に勤務。1920年から1938年まで神戸のF. S. Morse商会に勤務した。⁽³⁾ 来日後は主に綿の貿易に関わっていた。⁽⁴⁾

横浜での数年間をのぞくと、1964年7月9日に永眠するまで大半を神戸ですごした。最初は神戸市東灘区住吉で住友家から借りた家に居住したが、後に神戸市須磨区塩屋毘沙門山に洋館を建てて住んだ。そして太平洋戦争開戦の直前にアメリカ移住のために毘沙門山にあった屋敷を引き払い、コレクションを神戸港にある倉庫に移した。しかし日米開戦となり渡米がかなわなくなったため、塩屋ジェームス山の外国人住宅を借り居住した。⁽⁵⁾ 中立国スイス国籍であったため帰国せず第二次世界大戦中も日本にとどまり、1942年からは神戸スイス領事を務めた。

(2) コレクションの形成

カザールはどのようなきっかけで、いつから美術品の蒐集をはじめたかについては書き遺していない。遺族によれば、その両親も美術に対する造詣が深かったため、来日早々には骨董蒐集をはじめたのだろうということだ。来日十五年目に記された漆に関する手稿の冒頭には、日本で余暇の大半は骨董品蒐集にさかれたとあり、東洋の美術は総て魅力的であるが、当初から漆、なかでも日本の漆に惹かれたと自ら書き記している。⁽⁶⁾

コレクション形成の状況を物語る台帳が二冊遺されている[図2]。1冊は1922年1月の日付の入った“Own Curious(所蔵骨董)”，もう1冊には年紀は無いが“Sundries(雑貨)”の表題があり、2冊はほぼ同時期に記されている。“Own Curious”と書かれた台帳の表紙には、「No.1からNo.2001までと、No.5000からNo.8632までの骨董品が含まれる」と書かれており、内容はその記述のとおりである。一方“Sundries”と記される台帳の表紙には“Ordinary Porcelains(並の磁器)”としてNo.1から2000まで、“Old Prints(古版画)”No.3001からNo.3500まで、“Paintings(絵画)”No.4001から4100まで、さらに“Consignment



図1 U.A.カザール(和服姿の珍しい写真)

No.	Articles	Cost	Price	Date	Remarks
1	Sung	100	100		
2	Old	50	50		
3	Porcelain	20	20		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		

図2 1922年に書かれた“Own Curious”

Curios (委託骨董)”としてNo7001から7500までが区分され記される。しかし、実際の既述を見ると厳密には表記どおりに分けられておらず区分とは異なる品目が記される。

台帳の中を見ると、両冊ともに各品目について、番号・作品名・仕入れ値・評価額・売値などを書く欄が記される。そして、“Sundries”とある冊子の“Consignment Curios (委託骨董)”と記された作品については販売委託先が記される。このうち売却の成立した作品は線で抹消されており売価が記される。また売買が成立しなかった委託品については委託先からカザールの手元に返却された日時が記される。台帳にはいくつかの紙片が挟み込まれており、その一枚は牧浦商店との委託販売に関するメモ書きである。そこには委託品がもし一年たっても売れない場合は返却する旨が記される。牧浦商店は牧浦藤吉が経営する骨董店で、当時元町三丁目（神戸市）にあったことが確認できる。

もう一点の紙片は“Casal Oriental Art and Craft Collection” No.18 Maye-machi (opposite O.S.K. Building) ,Kobe (Japan) と印刷された厚紙の葉 [図 3] である。“Beautiful Japanese and Chinese Lacquers, Ivories, Cloisonnes, Bronzes & Brasses, Porcelains, Potteries, Old Embroideries & Brocades, Woodcarvings, old Cabinets, Kakemono, Netsuke etc. etc”、日本語に訳すと「カザールオリエンタルアーツ&クラフトコレクション」という店名の店を「神戸(日本)前町18番地(OSKビル反対側)」、現在の神戸市中央区前町に開いており、その店では「美しい日本・中国の漆器、象牙、七宝、ブロンズ・青銅器、陶磁器、古刺繍、木彫、古い棚、掛物、根付等々」を販売していたことがわかる。つまりカザールは、綿花の貿易に携わる会社で働きながら、美術工芸品を売買する店舗を持っており、またこの店以外でも元町の牧浦という骨董商に作品を委託して売買していたことがわかる。

ところで、前掲の二冊の台帳とは別に大阪市立美術館に作品が譲渡された時に一緒に譲り受けた作品リストが遺されている。こちらはタイプで打たれたもので、美術館には青焼きコピーの状態で引き渡された。表題に“Collection U.A.Casal - Object of Art over 100 years old” (カザールコレクション、100年以上前に制作された作品)とある68頁からなる一綴りと、“Collection U.A.Casal - Object of Art later than A/D/ 1830” (カザールコレクション、1830年以降に制作されたもの)とある31頁綴りの二種類からなる。

作品番号はNo.1からNo.5338までがあり、双方のリストは作品取得時の価格と推定制作年代が西暦で表示されている。前者を100年以上前のものとしていることと、後者は1830年以後に制作された作品としていることから、このリストが制作されたのがおよそ1930年前後であることがわかる。このリストのすべての作品が現在大阪市立美術館の収蔵品に含まれるわけではなく、一部は美術館に寄託される以前に売却されている。

これらのことから、1922年に冊子に書き始められたリストを使って売買しつつ作品を増やし、1930年頃に新たに手元に残っていた作品をまとめて書いたのが、作品とともに大阪市立美術館に納められた青焼きコピーのリストということがわかる。この1922年と1939年頃に書かれた二つのリストの内容を比較すると、前者のリストには漆器以外の作品があるが、後者は殆どが漆器である。つまりカザールは当初から漆器のみを購入したのではなく、最初は絵画、版画、陶磁器、七宝など多彩なジャンルの作品を蒐集していたが、途中で、漆器のみの蒐集へと切り替えたことがわかる。

さらにこれらのリストとは別に、カザール自身によって記されたコレクションの概略紹介がある。これは美術館に納められた1930年頃に書かれた作品リストの概略である。表題は、“Rough List of Lacquers-”(漆器の概略リスト・表1)とあり、内容は上記で紹介した後者のリストと同じくほぼ総てが漆器である。

この概略で興味深いのは現在コレクションの中核となっている「根付」がこの漆器の概要を表したリストの部分には



図3 カザールオリエンタルアーツ&クラフトコレクションの葉

なく、「緒締」めとともに、「印籠」の付属品として末尾に付記されていることである。外国人コレクターの間では根付は印籠よりも人気が高い。そのためカザールもコレクションの柱の一つとして根付を蒐集したと想像しがちだが、実際にはそうではなく蒔絵印籠コレクションの付属物として根付を取得していたことがわかる。⁽⁷⁾ カザールの根付コレクションには蒔絵をはじめとした漆器の優品が多い。このようにカザールの美術研究の中心は漆であり、日本の印籠についての論文を発表していることとも一致する。⁽⁸⁾

この“Rough List of Lacquers-” 末尾には、古美術商小澤亀三郎、京都山中商会支配人中西、大阪市立美術館望月信成、在神戸イギリス領事H.グレイヴス、ベルリン東洋美術館館長オットー・キュンメルによるコレクションに対するコメントが要約されている。⁽⁹⁾ このうち望月信成は開館前年から大阪市立美術館の開設にかかわり、昭和39年まで館長を務めた人物で、氏のコレクション評として大阪市立美術館の同僚であった前田泰次、上田令吉もそのコレクションについて高い評価を与えたことが記される。前田泰次は東京帝室博物館を経て大阪市立美術館に勤務の後、東京美術学校助教授となった工芸の専門家であり、上田令吉は大阪市立美術館に嘱託として勤務していた根付研究者であった。これら三人の大阪市立美術館関係者との交友関係は昭和16年に行き所を失った作品が大阪市立美術館寄託されるきっかけとなった。

研究者や古美術商コレクターがカザールコレクションを閲覧した場所は神戸市須磨区塩屋毘沙門山に立てられた洋館であった。カザールは何事にも器用な人であり、自らが設計に携わり洋館を建てた。⁽¹⁰⁾ そして洋館の別棟には美術品展示室が設けられており、作品はそこに展示されていた。⁽¹¹⁾

(3) 漆工、民俗学に関する研究

カザールは漆器を蒐集するだけでなく、その技術と歴史また民俗学の研究者でもあり、東京・京都・ロンドンなどにある内外のアジア関連の学会に属し学会誌に論文を寄稿していた。また講座などを積極的に行い日本漆工の啓蒙に努めた。“Japanese Art-Lacquers” と題するカザールが日本の漆器を紹介した記事が1958年3月20日から三回にわたって“The Mainichi (毎日新聞英語版)” に連載された。その冒頭に記された紹介文には「日本美術、漆を主な趣味とされているカザールさんは日本に滞在されて46年、神戸在住である。70歳になろうというのに大変活発にお仕事されており、象徴主義、民俗学、神話、迷信などに大いに興味を持っておられる。多くの論文を内外の学会誌に投稿しておられ、Ostasiatische Gesellschaft, Tokyo (ドイツ東洋文化協会の前身)、ロンドンのThe Japan Society、京都のKansai Asiatic Societyなど、多数の学会に属している。」と、端的に紹介している。⁽¹²⁾

また1955年11月3日、文化の日の朝日新聞に寄稿された「かくれた外国人功労者」という記事には、ヘルマン・ボーンネル(ドイツ人)とホセ・ルイス・ルバレス(スペイン人)とともにカザールがとりあげられている。⁽¹³⁾ 記事は、「半年ほど滞在するつもりだったのが、なんと四十年になりましたよ」とのカザールのコメントから始まっており、「外人の柳田国男」と紹介し、日本の味に魅せられて、ほんの趣味に始めた日本の風俗、習慣、民話がいつのまにかアカデミックな研究にとって変わってしまったと書かれている。

この記事によれば、カザールは来日早々180頁の「古き日本のスケッチ」という日本学入門書を記しており、それから三十余年、日本の古い習慣や祭礼を研究するにつれて、それらがヨーロッパの農民たちの生活と類似していることにますます興味をひかれたこと、そして日本の風習や祭の起源や意義について特に興味があること、神社や寺の古文書を調べたり、古老からの聞き取りなど、資料集めが大変だったこと、またまとめた論文はスウェーデンのストックホルム地理学会や、英米のジャパンソサエティーの雑誌に掲載され、日本文化の海外紹介に地味な活動を続けていること、最後に主な論文として「五節句一意味と歴史的発展」、「動物の民話—キツネとタヌキ、テング、カッパ、東洋におけるサル」、「日本の幽霊と妖怪、その民話」、「東洋の伝説における数、色、宝石の意味」、「日本の伝説と迷信における“幸福”の問題—七福神、マメと節分、お多福など」、「アジアのラカンと神々の伝承」、「『稲荷』日本の米国の神、その他の収穫の神々」などについて書いたことが紹介されている。別表にまとめたが、これらの刊行された論文の大半は現在大阪市立美術館に保存されており、また未刊の肉筆原稿も多数遺されている。⁽¹⁴⁾

2 大阪市立美術館蔵カザールコレクションの概要と特色

大阪市立美術館は昭和57年（1982）、の「根付」一括750点を始まりに、58年（1983）には漆工を中心とする文房具193件、59年（1984）には印籠・煙草入れ・煙管筒・櫛・笄などの装身具1271件、そして60年（1985）には漆工調度1043件を遺族から取得した。さらに平成2年（1989）には袋物の金具や簪など113件733点の譲渡を受け、カザールコレクションの総数は3409件、4333点にのぼる。

カザールコレクションが当館の収蔵品になったのは偶然の重なる結果ともいえる。前述のように1912年の来日以来、カザールは日本に滞在し日本美術の蒐集を続けた。しかし1930年代後半に入り日米関係が悪化するなか、家族とともに収蔵品をアメリカに移そうと考えた。昭和16年冬、須磨区毘沙門山にあった自宅を処分し、コレクションは梱包され神戸港の倉庫に運ばれアメリカ合衆国にむかう船への積み込みを待つばかりであった。ところが出航予定日が昭和16年12月8日の日米開戦より僅かに遅かったため、アメリカ行きはかなわずコレクションは木製コンテナに収納されたまま、神戸港の倉庫から親交のあった大阪市立美術館へ移動された。

カザールと家族は再び神戸に戻り、旧居のあった須磨区毘沙門山から少し西にあたる現在の垂水区塩屋ジェームス山にある外国人住宅へ移転した。中立国スイスの国籍であったため太平洋戦争中も日本にとどまることができた。ジェームス山の外国人住宅もそこそこの広さではあったが、展示棟をそなえた毘沙門山の家とは異なり作品を置くスペースはなかった。そのため一部の小品をのぞいて大半の作品は木製のコンテナに収納されたまま大阪市立美術館の三階倉庫におかれたまま戦中戦後を過ごした。⁽¹⁵⁾ カザールの没後、コレクションは大阪市立美術館に譲渡されることになる。

4300点を越えるコレクションのうちおよそ100点の中国漆器・犀角などの工芸、若干の朝鮮半島の漆器、琉球漆器、タイ漆器をのぞくと、大半は日本の漆器であり、江戸から明治期にかけて作られた蒔絵が多い。そのうち2000点以上が根付・印籠・緒締・煙草入・煙管筒・袋物金具・櫛・笄・簪などの装身具である。装身具以外に特筆されるのは、約270点の香合を含む約370点の香道具、200点以上に及ぶ硯箱や料紙箱などの蒔絵文房具、300枚を越える杯を含む400点余の飲食器である。これらの特色ある器物を中心にコレクションについて概観してみる。

(1) 根付・印籠など蒔絵装身具

カザールコレクションの特色の一つとして、小さな器物に精緻な技巧をこらした作品の多いことである。印籠や根付に代表される装身具にはその傾向が強い。大阪市立美術館がコレクションを取得した1980年代の前半には、装身具のコレクションの殆どが海外にあり、国内では大変珍しい収蔵品であった。

江戸時代後期、幕府による奢侈禁止令の影響により、装身具など小物に贅を尽くすことが流行し、多くの装身具が作られた。装身具のなかでも輸送が容易であったためか、根付と印籠の人気は欧米で高く、開国とともに海外の市場に流れた。そのため輸出を目的にした根付や印籠も多数作られた。一般に輸出漆器といえば粗悪というイメージを持ちやすいが、根付や蒔絵印籠に関していえば、輸出向けに作られた明治期以降の作品の中にも、日本の技を海外に伝えようという思いのこもった優品が見られる。

美術館譲渡されたコレクションには印籠約500点、根付750点とともに、約250点の煙管筒が含まれる。煙管筒は煙管を入れて携帯する筒で、携帯用煙草入れなどと組んで、帯にさして用いた。刀を腰に帯びる武士に対して、煙管筒と煙草入れの組み合わせは町人の装身具ともいわれる。象牙彫や木彫など、根付と通じる技法が見られるとともに、廃刀令以降は刀の鞘塗師の転職の場となり、様々な漆塗技法が展開された。このほか、煙草入れとして用いられた袋物の口金具や、印籠に用いる緒締もコレクションに含まれる。また蒔絵・彫り・象嵌などの技法を駆使した鼈甲・象牙・木製の櫛・笄・位置止、金工による簪なども500点を数える。装身具には工芸技法の粋を尽くし、花鳥風月・年中行事・民間信仰・風俗・風景など多様な主題に取材した図が表現されており、カザール氏をはじめ海外の人の目から見ると、日本の文化を知る格好の手がかりであった。先にも述べたが近年ようやく装身具などの小さな器物に施された技巧の妙が国内でも注目されはじめたが、その人気は未だ海外に比べるべくもない。

(2) 香合など蒔絵香道具

香合に分類したものには、茶人が好んだ円形や方形の小ぶりの錫縁の香合が含まれる。香合というには少し大きく不思議な形の作品も多い。箱書のあるものについては、「伽羅箱」、「菓子器」、「香合」、「香箱」などと分類ができる。しかし通常よりも大きなもの、外箱に「菓子器」と記される器もあり、その区別はあいまいである。制作時にはそれぞれが目的を持って作られたものであったのだが、書き付けがないと、現在では用途がわからず分類が困難なものも多い。江戸期に制作された各種の調度類には比較的厳密な規則があったようで、婚礼調度の制作については『婚礼道具諸器形寸法書』という書物に細かく記されている。⁽¹⁶⁾カザールコレクションを分類していて、器形の同定が最も難しかったは、便宜上香道具に分類したこの合子類であった。

これらのなかには「蒔絵和泉式部形香合」「蒔絵獅子舞形香合」「蒔絵狸々形香合」など、人物・動物や道具の形を象った異形のものが多く見られる。[図4]何かの形を象ったやきものの香合は、形物香合といわれ茶湯の世界で好まれた。安政2年(1855)には主にやきものであるが、「形物香合相撲番付表」が版行されている。江戸時代の茶の湯道具として国内に伝世した蒔絵の形物香合はやきものが圧倒的に多く、蒔絵香合はあまり伝世していない。⁽¹⁷⁾しかしカザールコレクションについてだけ見ると、蒔絵による形物の合子(箱)類が多数含まれており、それがコレクションの特色になっている。同様の蒔絵による形物香合ともいべき合子(箱)類は18世紀に日本から輸出された王侯貴族の蒐集品、それを範とした19世紀の欧米の蒐集家のコレクションに多く含まれる。



図4 カザールコレクション蒔絵香合

(3) 蒔絵朱杯など蒔絵飲食器

大阪市立美術館の蒔絵朱杯は日本でも有数のコレクションである。カザール蒐集の390枚をはじめ、バルタザール・ウンゲルン・シュテンベルク（1879-1952）コレクションの60枚、森新治郎（1893-1981）コレクションの110枚をあわせると、560枚近い数の杯を所有している。杯の高台裏には作者の銘が記されたものも多く、また晴れの場で用いられるため、七福神、年中行事、四季の花鳥、名所景物など吉祥にちなむ文様が描かれているものが殆どである。

さらに25点の蒔絵行厨（提重・花見弁当・野弁当）が含まれているのもコレクションの特色の一つだ。重箱、徳利、銘々皿、杯等を一具に納めて携帯する弁当箱で、花見や観劇の時に用いられた。実用の器であるにもかかわらず、蒔絵で精緻に図が表されている。

杯も行厨もかつては多数作られていたのだが、日本の収集家の興味をひかなかったのか、海外に流失してしまい、国内に残る稀少な例となっている。

(4) 蒔絵文房具

コレクションのうち230点を超える作品を有するのが文房具である。このうち、料紙硯箱や文台硯箱と一組になっているものも含めると、硯箱の総数は120点を数える。ほかにも25点の文箱をはじめ料紙箱や文台、短冊箱、色紙箱、軸盆、筆や矢立が含まれている。詩歌を記す筆や墨、硯などを収納することから、硯箱の装飾には詩歌や物語に基づく主題が好まれた。カザールコレクションではコレクターが日本の習俗や文化に造詣が深かったことから、「七夕蒔絵硯箱」（山本春正）など、四季の風物に取材する作品が多く。また蓋に穿たれた象牙製の水車が水銀の力によってまわる絡繰り仕立ての「橋姫蒔絵硯箱」のように日本ではもはや見ることのできない技巧的な作品が含まれる。一般に近代に築かれた漆工関係のコレクションは、茶の湯の場で使うことを目的に蒐集されたものか歴史的意義のある作品が多く、本コレクションのように、精緻な蒔絵を用いた技巧的かつ豪華な作品は珍しい。

(5) 婚礼調度

蒔絵を施した調度類では実用品というよりはむしろ儀式に用いる目的か公的な装飾品として制作されたものが多い。手箱や鏡台など、本来化粧や容姿を整えるために用いられた器物に豪華な蒔絵の作が多く見られる。特に江戸時代、将軍や大名家の息女の婚礼の折りに整えられた大揃いの婚礼調度には豪華な蒔絵が施されている。調度は所蔵者の格式によって、梨地高蒔絵、黒地平蒔絵などと区別がなされており、将軍や有力大名の系譜につながる姫君の婚礼に際して制作された格式の高い調度類は梨地に高蒔絵で華やかな図様が描かれている。こうした調度類は所蔵者の死後も婚家に遺る場合と、形見分けによって親族などに配れた場合がある。もともと実用品ではなく、格式を示すための調度であったことから、明治になり生活様式が変化すると多くは市場に流れた。⁽¹⁸⁾

カザールコレクションに含まれる婚礼調度のうち一つは九曜紋が付されており松と橘が蒔絵されている。そのうち手箱・匂箱・硯箱には源氏物語、伊勢物語に取材した物語絵が蒔絵で表されている。平山堂伊藤平蔵が札元になって昭和7年10月に東京美術倶楽部で行われた平山堂創業三十五周年記念展覧入札会の目録に写真入りで掲載されている26点の一部である。同じ掲載作の一部は東京国立博物館蔵と個人蔵のものが確認されており、さらに同系統の作品が鍋島報恩会にも収蔵されている。九曜紋を使用する大名家としては細川家が考えられるが、この調度の出所がたどれるのは先の入札の時点までであり、残念ながら誰のために作られたものかは不明である。

もう一方の調度は梨地に祇園守紋の付された枝垂桜を高蒔絵で表す豪華な調度の一部である。こちらは大正8年4月5日から7日にかけて、東京美術倶楽部で開催された「池田侯爵家売立目録」に掲載されていることから、この時点まで池田家の所蔵であったことが確認されている。

その他雪輪、丸に十字などの紋章が付された蒔絵調度が単品で収蔵されており、その総数は約百点を数える。近代、大名婚礼調度の多くは散逸してしまっているため、当コレクションの蒐集は貴重であり、それぞれの調度類が誰のために作られたかさらなる研究が必要である。

(6) 犀角・彫漆・螺鈿—中国・朝鮮半島・琉球の漆工

中国の犀角の杯のコレクションも充実している。玉・石・竹・木・牙・角・骨の彫刻は中国では古来より盛んである。犀は古代には黄河流域に生息しており、秦漢時代には皮は鎧に、角は彫刻の素材として、また効能があることから薬として用いられていた。明清時代には自然の素材を用いた置物や容器の製作が再び盛んになったが、既に犀は国内では絶滅しており、犀角は輸入にたよらざるをえない貴重な素材となっていた。しかし犀角を彫刻した器物は皇帝や貴族はもとより、士大夫に好まれ、犀角を詠む詩も作られている。写真の犀角には底部に浙江省無錫の名工「尤侃直生」の銘がある優品である。コレクションには60点の犀角の杯と筆洗が含まれる。

彫漆と螺鈿の盆、合子などは100点に及ぶ。中国、明時代に制作された「彫漆花文盆」、「螺鈿楼閣人物図盆」、清時代に制作された彫漆や螺鈿の大小の盆、「螺鈿雲龍文盤」など琉球の優品も含まれている。

以上、カザールコレクションについて概観したが、やはり一番の特色は装身具、香合など江戸期の技がこめられた小さな器の多いことである。精緻な技術と、多彩な主題を好んだことが特筆される。これは同時期の日本人美術コレクターの傾向とは異なっている。大正から昭和にかけて日本のコレクターの注目を集めた漆器といえば、棗、盆、硯箱であろうか。他には中国の堆朱や螺鈿の香合、日本の中世以前の蒔絵硯箱や手箱、根来といわれる中世の朱漆器、鎌倉彫、高台寺蒔絵といわれる桃山期の黒漆塗平蒔絵で秋草文を表す調度、経箱などであった。戦前には江戸後期から明治にかけて制作された蒔絵のみを対象とする日本人コレクターはまだ現れていない。大正から昭和のはじめ、太平洋戦争以前までに形成された日本のコレクションはおよそ茶の湯道具を中心としたもので、カザールが蒐集した江戸後期から明治の蒔絵には殆ど関心がはられない。日本と欧米のコレクターの間で生まれた違いは何に起因するものだろう。次にカザールが日本の漆器についての知識をどのようにして得たのか、蒐集の規範をどこにおいていたのかについて考えてみたい。

3 欧米の蒔絵コレクション

(1) カザールの著作から

1961年に上智大学出版局から発行されたカザールの著書“Japanese Art lacquer”は欧米では日本の漆器について書かれた基本文献の一つとして広く知られている。⁽¹⁹⁾ この出版物に先立ち、大正末年頃に書かれた178頁のタイプ打ち草稿が遺されている。

草稿の構成は、前書き、序に続き、漆・蒔絵など漆工技法に関する材料や各種技法、中国と日本の漆工の歴史について記され、最後に塗師と蒔絵師の人名録が付けられる。草稿の前書の冒頭にはバジル・ホール・チェンバレンの『日本事物誌』⁽²⁰⁾の漆の項目から、「漆器の鑑賞は自然と身につく趣味ではない。しかし、ひとたびこの趣味を身につけて覚えると、だんだん昂じてきて、最良の漆器を神聖なものとして崇めるほどになる。すばらしい漆器を、新しく日本に来た人にふと見せたり、欧米の無趣味な人たちに漆器を贈物として贈るといふことは、日本のことわざにもある通り、『猫に小判』である。相手はそれをちょっと取り上げ、ちらっと見て『なんてかわいらしくきれいなこと!』と言ったきり、それを下に置き、せいぜい二ドルぐらいだろうと想像する。ところが実際は百ドルもして、何年も辛苦して作った品物で有り、すばらしい美術品なのである。」という記述が引用される。⁽²¹⁾ さらに読み進むと、欧米人の大半が日本の漆器について無知であるため、粗悪な輸出漆器を購入してしまっている。知識があれば、もっと良質の本物の日本の漆器を手に入れられるのに残念だという主旨の文章が記されており、自分の得た漆に関する知見を書きとめ、漆器の入門書を刊行する旨が記される。

この草稿が記されてからほぼ40年後に刊行された“Japanese Art lacquer”では、中国が省かれており、日本の漆工のみが取り扱われている。構成は序、漆、材料と技術、蒔絵、各種装飾技法、彫漆、日本における漆器装飾の歴史、作家と銘、漆の手入れ方法などである。1925年の草稿と細部の比較は必要であるが、後者も欧米人にとっての漆器入門書として書かれ、海外のコレクターの間ではよく知られる書となった。

カザールの記した著作を概観すると、収蔵作品の精細な調査を行い、制作現場を実際に訪ねて技法・材質に関する知識を得ていることに気づく。さらに参考文献が膨大である。ドイツ語(母語)・イタリア語(イタリアで育った)・英語・

フランス語など堪能な語学力を駆使して、同時代の日本人漆工研究者が知りえなかった欧米における日本の漆器研究の成果を得ている。カザールの没後、蔵書は整理され、スイス在住の友人ハロルド・ミュラーに譲渡された。⁽²²⁾ カザールが自らタイプで作成した目録には千冊を越える書籍や雑誌が記されており、さらに余白には鉛筆書で、リストにもれた本の題名が補われている。その範囲は欧米における日本文化、文学、宗教、民俗、美術の研究書、啓蒙書を始め、研究雑誌、旅行記、やガイドブックなど多岐にわたる。

“Japanese Art Lacquer”の冒頭には、日本の漆器は十六世紀にポルトガル人によってまずヨーロッパに紹介されたこと。そしてロココの時代シノワズリの流行によって、ヨーロッパには中国から陶磁器・青銅器、インドから刺繍、ペルシャから絨毯などが入ってきていたこと、日本からは鎖国の影響によって僅かな高級漆器がオランダ東インド会社や中国人などによって輸出されていたことが記される。

近年でこそ日本の漆工史研究者の間で、この事実が認識されるようになった。しかしカザールが“Japanese Art Lacquer”を執筆した1964年当時、日本国内の漆工史研究者の間における在外漆器についての見識は低く、輸出漆器に関する在外研究の成果は知られていなかった。日本国内においては輸出漆器の存在は大正期におこった切支丹研究のなかで、聖餅箱など国内に残存した若干の漆器が再発見され、南蛮美術やキリシタン研究のなかで注目されていた。また日本から欧米に輸出された家具や、蒔絵パネルを使った家具がヨーロッパの王宮などに伝わっていたことは、山田智三郎や小林太市郎の研究によって紹介されている。⁽²³⁾ しかし、在外輸出漆器についての研究は、渡航そのものが難しかったこともあり、1970年代までは殆ど未着手の状況であった。

ところが欧米の研究者たちの間では、現地に存在する日本から輸出された漆器、蒔絵器物の調査によって、漆器の輸出が16世紀後半、ヨーロッパとの交易の開始とともに始められたこと。17世紀の前半には、キリスト教の禁止と鎖国によって、オランダ東インド会社を窓口にした漆器貿易と中国との交易が続けられたこと。鎖国によって交易の窓口が南ヨーロッパのカトリック国から北ヨーロッパの新教国であるオランダへと変化したことによって、輸出漆器の様式も変化したこと。1600年代にはヨーロッパで人気のあった蒔絵家具など大型の器物が制作され輸出されていたが、18世紀に入るとしだいに大きなものは輸出されなくなったことなどが知られていた。

さらに戦後になるとオランダ東インド会社の記録をもとに、主に陶磁器の研究が主であったが、日本を含むアジアとの交易についての研究が徐々にすすめられ、1959年にはマーサ・ボイヤーによって在外日本漆器に関する初めての纏まった著作である“Japanese Export Lacquer from the Seventeenth Century in the National Museum of Denmark.”が刊行されている。これらの研究を通して、ヨーロッパでは17世紀から18世紀にかけて、東洋趣味の流行とともに、日本からの輸出漆器が歓迎されたこと、日本製の代用として日本製を模した中国製、あるいは現地で開発された蒔絵を模した塗装技術を用いた家具が盛んに作られたことが知られていた。流行遅れになった日本製蒔絵家具の一部を転用した家具が作られるようになり、これらの家具がシノワズリとよばれた東洋趣味の居室に飾られたこと。さらに装飾品として中国製あるいは伊万里の磁器の壺や瓶子や置物、金銀蒔絵が施された器が日本から輸出された。時には手箱や小さな箱、飯櫃など様々な蒔絵調度に現地の金工師がモールディングという飾りをつけて加工して用いられたこと。これらは日本で使われている香合よりも少し大きな、国内向けの作品とは蒔絵の合子や箱、小さな箆笥などであり、マリアテレジアとそのコレクションを受け継いだマリー・アントワネットの蒐集品としてヨーロッパに伝わっていたことなどが知られていた。

以上の欧米では周知の事実であるが、1960年代までは日本国内の漆工研究者には殆ど知られていなかった。在外研究が可能になり、日本の漆工史研究者の間で在外の輸出漆器の研究が始まるのは戦後、しかも1970年前後のことである。⁽²⁴⁾ 輸出漆器の家具やキリスト教関係の調度、マリー・アントワネットが収蔵していた蒔絵など在外の漆器がカラー図版で一般に紹介されたのは、1978年吉村元雄氏ほかの編集により毎日新聞から刊行された『在外日本の至宝 工芸』⁽²⁵⁾においてであった[図5]。これ以後、海外の文献の入手、欧米の渡航が容易になり、研究は格段にすすみ、現在では欧米と日本における日本の漆工研究者の認識の差は少なくなっている。

しかし既に述べたように、カザールの著作が刊行された1964年当時は、論文が欧米の言語によって書かれていたこともあり日本における輸出漆器についての研究は殆ど未着手の時代である。輸出漆器が研究の目途ではないため詳細については記されていないが、カザールは欧米で書かれた文献を用いて、日本からの漆器輸出の流れを把握した上で、

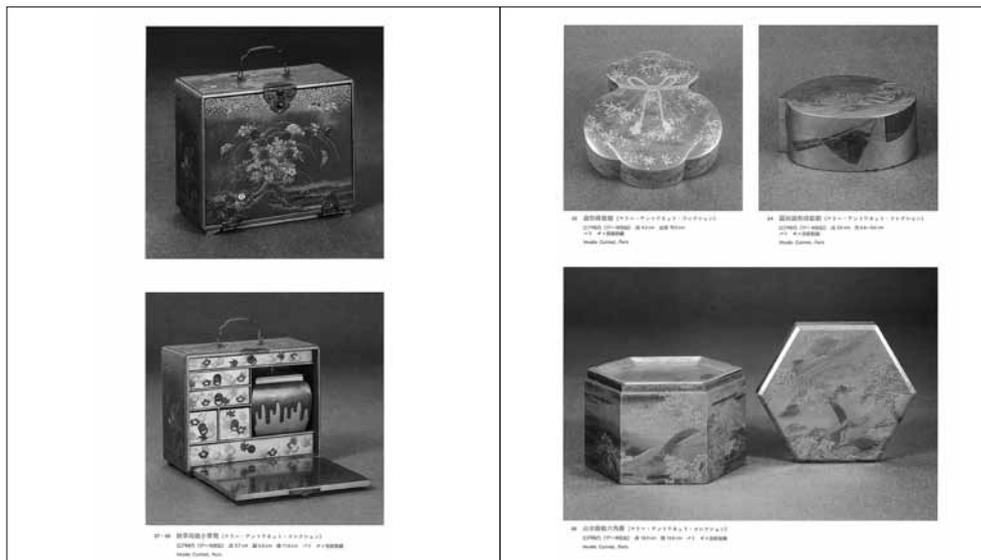


図5 『在外日本の至宝』に掲載されたマリーアントワネットの蒔絵香合など

“Japanese Art lacquer” を執筆したことがわかる。

“Japanese Art lacquer” には18世紀の前期ヨーロッパの王侯貴族の間にポンパドゥール夫人に代表されるような、熱心な日本の漆製の家具のコレクターが現れたと書いている。⁽²⁶⁾ そしてこうした家具が日本から輸出されなくなった時、それに変わったのは最初中国製の安価な家具であること。⁽²⁷⁾ 次にはパリのマルタン兄弟が日本や中国の漆器を模した、光沢のあるワニスを用いた家具を作り出すことに成功し、様式が変化する19世紀までそのワニスの技法がより質を落としながら作られたことなどを記す。⁽²⁸⁾

またカザールはロンドンにあるアジアソサエティーが発行している研究誌“Transactions and Proceedings”、1939-41号に投稿した“Intro”に、近世装身具としての「印籠」について書いている。ここでは「印籠」の語が、『日葡辞書』、「ウィリアムアダムのリチャードウィッカム宛ての書簡」に見られることなど、日本語や英語の文献を駆使して、日本の研究者が誰も書いていない事実を記している。特に「ウィリアムアダムのリチャードウィッカム宛ての書簡」⁽²⁹⁾ の日本語訳は戦後翻訳されて『大日本資料』に収められているが、原文“Diary kept by the Head of the English Factory in Japan”は大英博物館に所蔵されており、公刊されていなかったことから、その複写を手に入れたことがわかる。

(2) 蔵書からみえるもの

さらに遺された蔵書目録からも、カザールが欧米で発行された漆器に関する文献を参考にしてきたことが明らかである。こうした文献は戦前の日本人漆工研究者が殆ど用いていなかったものである。その一つはシャルル・エフルッシの日本の蒔絵に関する著述である。⁽³⁰⁾ エフルッシのこの文献については戦前の日本の漆工研究には取り上げられていない。エフルッシは1878年に、自らが主筆をつとめたガゼット・デ・ボザール誌に“Les Lacques Japonais Au Trocadéro” トロカデロの日本漆器、について記している。⁽³¹⁾

日本の漆器は幕府が開国すると、海外への格好の輸出品となっていった。1862年のロンドン万国博覧会には、駐日総領事オルコックが蒐集した漆器が、そして1867年のパリ万博には徳川幕府の命によって集められた漆器が出品された。明治に入ると、政府が初めて賛同を決めた1873年のウィーン万国博覧会、そして1876年アメリカ合衆国建国百年を記念してフィラデルフィアで開催された万国博覧会には政府が集めさせた漆器や蒔絵が多数出品され、欧米での日本漆器ブームが高まった。この日本熱の高まりをうけて開催されたのが1878年パリの万国博覧会である。日本政府はシャン・ド・マルスに設けられた産業製品の見本市会場と、トロカデロに設けられた古美術展示会場の両方に漆器を展示した。⁽³²⁾

前者は産業製品として新しく作られたものであり、後者は古くから日本に伝えられた古美術の名品である。トロカデ

口の漆器は東京の起立商工会社、横浜の箕田長次郎が日本各地から買い付けた作品、そして日本政府の博物館が出品のために入手した88点の作品が含まれていた。明治政府は日本の古美術を紹介する目的で、現在国宝に指定されている「八橋蒔絵螺鈿硯箱」や重要文化財「扇蒔絵手箱」、「男山蒔絵硯箱」、「砧蒔絵硯箱」など古今の蒔絵名品を展示し、それらの作品は現在の東京国立博物館の前身である博物館事務局の収蔵品として、博覧会終了後日本に持ち帰った。この会場にはフランス人のコレクターであるビング、ビュルティそしてエフルッシの蒔絵も陳列された。⁽³³⁾ パリ万国博覧会で、政府は前田正名に命じて、日本の歴史、地誌、そして漆工・陶磁器・金工・七宝などの技法と歴史についての出品解説を編纂させ、フランス語に翻訳して2500部出版発行した。⁽³⁴⁾

エフルッシの“Les Laques Japonais Au Trocadéro”（「トロカデロの漆器」）は1878年のパリ万国博覧会、トロカデロの日本古美術陳列場に展示された日本の漆器に関する随想である。日本政府が発行した解説書を引用しながら、自らとその友人の出品した日本の蒔絵小品の挿図とともに紹介している。挿図はエフルッシの金蒔絵の琵琶型の箱、ビュルティの金蒔絵の印籠、カーン夫人の金蒔絵の箆筒・白い（卵殻塗か）結び文形の箱・金蒔絵の扇形の箱のスケッチが使われる [図6]。そしてこの中で、エフルッシはマリー・アントワネットが漆器のコレクションを持っていたことについてふれている。日本の鎖国中はヨーロッパで蒔絵を手に入れるのは大変難しく、日本でも姫君の持ち物であった蒔絵は海外には限られた数しか輸出されていなかった、そしてボンパドゥール夫人やマリー・アントワネットなど限られた王侯貴族のみが所持することができたと述べられる。しかし日本の開国、明治維新によってこの20年間で、ようやくパリの店でも買えるようになったとも記している。⁽³⁵⁾ このエフルッシの記述は1990年にアメリカ合衆国で発行されていた雑誌“The Art Amateur”のコラム“Bric A Brac”⁽³⁶⁾にも転載紹介されている [図7]。これらの記事から、ジャポネズリ全盛時代の欧米において、日本の蒔絵に関する貴重な情報の一つと

LES LAQUES JAPONAIS AU TROCADÉRO. 901
en laque d'or, de plus récente fabrication, formant dièdre, avec petits paysages.
Tous les objets exposés révèlent un art profondément national au point de vue du sentiment, de la forme et des procédés. Même après que les Européens ont pénétré au Japon, après les prédications triom-



phantes de saint François-Xavier et de ses successeurs, après l'établissement des Hollandais à Nagasaki, l'art japonais conserve toute sa pureté. Sans doute les Portugais s'efforcèrent, après les « Bataves », d'introduire au Japon des modèles de l'industrie européenne, et on retrouve inséparablement quelques traces de ces importations dans les productions indigènes; mais cette influence, d'ailleurs très limitée, de l'Europe est acceptée et non subie. De Siebold parle des emprunts faits par les Japonais aux Européens, en constatant cependant qu'ils se les assimilent et les transforment en leur donnant le caractère national.

図6 “Les Laques Japonais au Trocadéro”に掲載されたエフルッシの蒔絵



図7 “Bric A Brac”に掲載された蒔絵

してこのエフルッシの随想が広まっていたことが推察される。⁽³⁷⁾

カザールの蔵書にはもう一冊ルイ・ゴンスの著書“L'Art Japonais”が含まれている。同書の“Les Laques”の項には“Les Collections Europeenes”という一文があり、前述のエフルッシとカーン夫人の作品のスケッチが転載されており、さらに別コレクターの作品のスケッチが色刷りで掲載されている [図8]。ポンパドゥール夫人やマリー・アントワネットの漆器コレクションについてもより詳しい情報が記される。

エフルッシのエッセー、そしてルイ・ゴンスの“L'Art Japonais”の両誌が蔵書の中に含まれていることから、カザールは日本からの輸出漆器が18世紀の仏蘭西などにおいて、王侯貴族など限られた人々に愛好されていたという事実をこれらの19世紀にパリで刊行された書籍から得ていたことがわかる。そしてこの19世紀のコレクションがカザールの漆器蒐集に少なからず影響を与えた。



図8 “Les Collections Europeenes”に掲載された
蒔絵

(3) 欧米と日本—蒔絵コレクションの違い

カザールコレクション形成の一端をうかがうことのできる資料の一つが“The Japan Art-Lovers Club, EXHIBITION, Kobe, Japan”, November, 1925 と題された図録である [図9]。奥付に記された日本文には発行者が「日本美術鑑賞会」とあり、その所在は北野町にあった神戸トーアホテルとなっている。クラブの名誉会員として、兵庫県知事であった平塚廣義と服部一三の名前があがるが、そのほかは指導者として、会長にカザール、副会長にHマックスウェル、その他コミティーとメンバーあわせて13人の名前がある。⁽³⁸⁾

展示会に出品された作品はブロンズ、中国と日本の七宝・絵画、日本の陶磁器、中国と日本の漆器・根付・錦絵、中国の陶磁器、刀装具、象牙・木彫、犀角杯に分類されており総数は530点に及ぶ。漆器はカザール氏の所蔵品であり、その大半は現在もカザールコレクションとして大阪市立美術館に収蔵されている。ここで紹介された日本の漆器は故事

人物蒔絵提重、蒔絵東天紅型置物 [図9左上]、東海道五十三次蒔絵箱など、精緻な蒔絵を施したもので、どれも江戸後期から明治期にかけて制作されたものである。また和泉式部蒔絵香合 [図9左下] のように19世紀末のヨーロッパコレクターが蒐集した精緻で小さな作品が含まれている。

カザールが日本の蒔絵を研究する時、19世紀末にフランス人コレクターによって書かれた書籍を参考にしたことについて述べた。カザールのコレクションは19世紀末フィラデルフィア、パリ万国博覧会で蒔絵を購入したボルチモアのウィリアムとヘンリー、ウォルターズ父子の蒐集品、ボストン美術館に収蔵されたウィリアム・スタージュス、ピゲローのコレクションなど、欧米で19世紀末に形成された蒔絵を中心にした漆器コレクションと共通点が見られる。⁽³⁹⁾ 明治初年から始まった蒔絵を中心にした古漆器の欧米への輸出は1870年代がピークであり、しだいに良質の作品が手にはいりにくくなる。また輸出を見越した珍奇な品、輸出用の粗製濫造品が増加し、市場は縮小していった。⁽⁴⁰⁾ それとともに、東洋美術コレクターの興味は蒔絵から離れ、中国陶磁、日本の仏教美術、琳派の絵画など別の方向へと転じてしまう。

日本における蒔絵の蒐集とはどのようなものだったのだろうか。既に述べたように国内では、書画骨董を蒐集することはあ

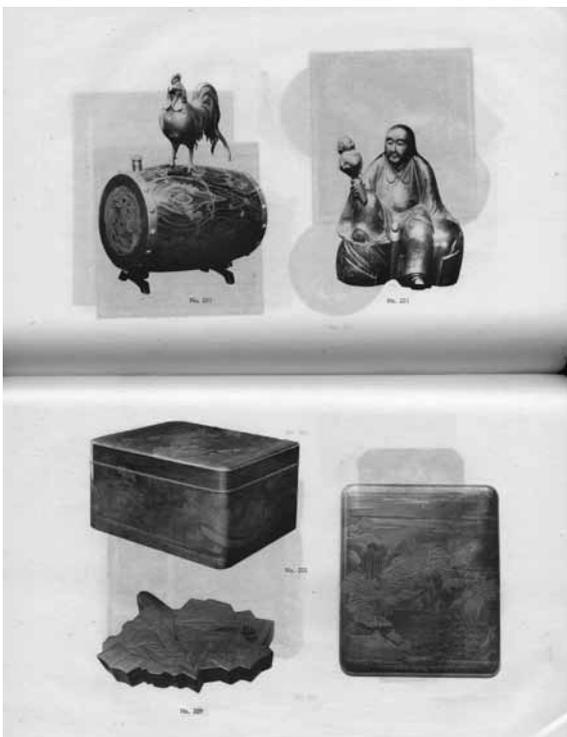


図9 “The Japan Art-Lovers Club”展
カザールコレクション出品作

ったが、その目的は茶の湯を楽しむ、室礼のためであったりした。そのため蒔絵に特化したコレクションは近世以前には形成されていない。日本における漆器制作の歴史については、宝永2年（1705）年に刊行された『蒔絵為井童草』に短くふれられている。しかし制作の歴史や技術について詳述した出版物は、前述の1878年のパリ万国博覧会において、前田正名の編纂したフランス語の刊行物、黒川真頼の著した工芸志料が最初である。続いて1900年パリ万国博覧会に際して、日本政府が刊行した『稿本日本美術史』にも記述がある。

漆工単独の編年史として書かれた最初の書籍は昭和5年（1930）に刊行された六角紫水の『漆工史』である。六角紫水は江戸後期の漆工、特に蒔絵に関し「漸次華麗緻密に傾き中頃に至りては日に精巧の極度に達した」とし、技術が極地に達したことを述べる。そして、「其技巧に走る事の烈しき為に漸次思想上に於ては退却の傾きを生じ只形式に流るる様になったのは止むを得ない」。つまり技に走り内面がおろそかになったことをあげ、最後には「故に末期に於ける作品は技巧の外何等趣味の見る処なきに至り一方には漸次粗製濫造の方法も考へられ、遂に墮落の極に達したので徳川幕府の衰亡と共に末期芸術の価は殆ど地に落ちたのは遺憾である」と江戸後期の蒔絵を全く評価していない。

その後長らく江戸後期の蒔絵が「技巧に走り見るべきものがない」とする評価は定着し、漆工史のなかでは常に語られるようになる。この主張の背後にはおそらく徳川後期文化への批判的な風潮、日本文化の偉大さを表明しようとする戦前の国粹主義的な流れがあることが推察できる。しかし漆工史上で、江戸後期の蒔絵のこうした評価は、市場における江戸後期漆工作品の評価とも連動していることであり、また蒐集家の嗜好をも左右したことは容易に想像される。この時点では日本国内には、海外における江戸後期の蒔絵に対する高い評価などは伝わっていなかったのである。

つまりカザールが来日した明治末期、欧米での蒔絵蒐集に関する熱狂的なブームは既に終わっており、良質の蒔絵は19世紀末のように欧米市場には流れていなかった。むしろ粗悪な輸出品が日本の漆器として販売されていた。しかし日本国内には江戸後期の蒔絵がまだ存在しており、売り立てによっては名家の作品が市場に現れた。日本人コレクターの関心の外にあった蒔絵であることから、手に入れることは難しくなかった。そのためカザールは19世紀後半に欧米で形成されたコレクションを規範とする作品を日本で集めることが可能だったわけである。そしていったん手にすると、蒔絵は持つ人を虜にしたわけである。1925年の草稿に引用したバジル・ホール・チェンバレンの「漆器の鑑賞は自然と身につく趣味ではない。しかし、ひとたびこの趣味を身につけて覚えると、だんだん昂じてきて、最良の漆器を神聖なものとして崇めるほどになる。」という言葉はカザール本人の感慨でもあったのである。



図10 塩屋カザール邸での美術愛好家の会合

おわりに

カザールコレクションの蒔絵を中心とした漆器のコレクションは譲渡された当時、日本国内の漆工研究者の眼には極めて異質なコレクションと映った。当時、多くの美術館や博物館が収蔵する漆器は、平安時代から桃山時代に至る作品が中心であり、江戸時代の作品といえば幸阿弥家の制作した婚礼調度であった。五十嵐道甫、山本春正、飯塚桃葉など一部の作家の作品をのぞくと、江戸期の作品は研究対象にもなっていなかった。また、茶道具の蒐集家にとっての漆器は棗や香合、硯箱であった。

そのような状況において、細かく細工を施した小さな印籠や〔図4〕に示した蒔絵香合など精緻で技巧的な作品を漆工史の流れの中に位置づけるのはとても難しいことのように考えられた。当時既に研究者の中には欧米の蒔絵コレクションを調査された方々もおられ、海外のコレクターや美術館が所蔵する作品との比較が大切であることを助言いただいた。前述の『在外日本の至宝 工芸』の編集者でもあった吉村元雄先生からは、一見新しく見えるこうした技巧的な作品にも、18世紀前半までに制作されたものが含まれていること、それはマリア・テレジアの蒐集品など、ヨーロッパの王侯貴族の収集品のインベントリーからわかることなどをご教示いただき、1980年代の初期には実際にヴェルサイユ宮殿で蒔絵コレクションの調査をする機会にご一緒させていただいた。

2004年に開催した『万国博覧会の美術』で、博覧会を通して多くの蒔絵が海外に渡ったこと、その頃江戸期にヨーロッパに渡り、王侯貴族の蒐集対象となった日本の蒔絵の存在に脚光があたり始めたことが記録や文献を読むうちに少しずつわかっていった。またその後、それは主に1870年代というほんの一時期のことであり、欧米の感心はすぐに日本の蒔絵から遠のき、中国の陶磁器、日本の仏教美術、鎌倉の絵巻、近世の屏風などへと移っていったことなどが明らかとなった。同展覧会の開催にあたり、いくつかの海外のコレクションを調査することができ、文献を入手できたことも研究の手助けとなった。

江戸後期から明治にかけて作られた蒔絵は現在では再現が不可能なほどの技が用いられている。しかし明治から昭和にかけて、日本人がその価値判を見誤ったため、作品の多くは海外に流失してしまった。江戸期の蒔絵を中心とした高度な技術が見直され、それを受け継ぐ明治期の技巧的な作品に注目が当たりつつある今日、その価値は高まるばかりである。スイスから来日し、大正から昭和にかけて、蒔絵の価値を正当に見極め、その見方を欧米で紹介しようとして作り上げられたカザールコレクション。日本人そのものが日本の過去についての知識を継承できなくなった現在、その評価は時代とともに高まっていくはずである。

註

- (1) Ugo Alfons というイタリア的な名前の表記であるが、母国語はドイツ系スイス人として暮らしていたので、U.A. Casal の表記を好んだ。
- (2) カザールコレクションにてについては、取得年ごとに大阪市立美術館から『根付』(1982)、『文具』(1983)、『装身具』(1984)、『調度』(1985) の図録が刊行された。コレクション件数と点数は数え方により若干異なることがある。旧カザール邸とカザール氏の写真、若干の著作などの資料については大阪市立美術館鞍馬品図録15『調度』の巻末と『カザールコレクション選集』(1999) に簡単に記した。
- (3) ソルベイ社 (Solvay Werke) はドイツ (現ベルギー) の化学会社、フォルカート・ブラザーズ社 (Volkart Brothers) は1851年ヴィンタートゥール (スイス) に設立された商社で、アジア、南米に拠点をもち、ココナツ、コーヒー、綿、シナモン、真珠などの貿易を行っていた。ナボーツ商会 (Nabholz & Co) は横浜の商社か、ジョージ・H・マクファデン・ブラザーズ社 (George H. MacFadden & Bros) はアメリカ合衆国の綿商社。モース商会 (F.S. Morse) は木綿の品質検査や管理を行うイギリス人が設立した神戸の会社である。
- (4) U.A. Casal の経歴については “Historisches Lexikon der Schweiz (『スイス歴史事典』)”、スイス領事館に提出した履歴書、R. Schinzinger “In memoriam U.A. Casal” Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens” (OAGドイツ東洋文化研究協会が発行する紀要) 1965, 46号 1-2 頁、 “In memoriam: U.A. Casal” “The Transactions of the Asiatic Society of Japan” (日本アジア協会が発行する『日本アジア協会紀要』)、série3, vol.9, 1966, 125-130頁などを参照した。
- (5) ご家族の聞き取りによる。
- (6) 本論文3 欧米のコレクターによる蒔絵蒐集 (1) カザールの著作からを参照。

- (7) カザールの根付コレクションには蒔絵をはじめとした漆器の優品が多い。根付コレクターは印籠から根付をはずして根付だけを大切に保管する。カザールは逆に大切な印籠に傷がつかないように根付を印籠からはずしたのかもしれない。
- (8) 'Inro' "Transactions and Proceedings" (ロンドンジャパンソサエティーの発行する研究紀要) 1939-41, The Japan Society, London
- (9) 小澤亀三郎 (-1953) 古美術商溪苔堂を営む。中西は大阪山中商会の支配人。望月信成 (1899-1990)、前田泰次 (1913-1982) 東京帝室美術館、大阪市立美術館、東京芸術大学教授、上田令吉 (?-1945) は大阪市電気局及び大阪市立美術館嘱託、『根付の研究』(1943)の著者。オットー・キュンメル (1874-1952) は著名なドイツの東洋美術史研究者。
- (10) 洋館の図面の一部が残る。
- (11) 作品を収めた部屋にかかっていた「古髹蔵」と記された額字が遺される。「古髹蔵」と書かれた印は収蔵品一点づつとその外箱に貼られている
- (12) Ostasiatische Gesellschaft, Tokyoは東京にあるDeutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG、ドイツ東洋文化研究協会の前身)、The Japan Society, Londonはロンドンにあるジャパンソサエティー、Kansai Asiatic Society Kansai Asiatic Society, Kyotoは1949年京都で結成された(既に解散)アジア日本文化研究団体である。
- (13) 二人の人物はいずれも大阪外語大学でドイツ語、スペイン語の教鞭をとっていた。
- (14) U.A.Casalの著作「古き日本のスケッチ」については未祥である。著作物は表2—1、2—2に記した。
- (15) 美術館は戦時中陸軍の高射砲部隊、戦後は米軍により接収されていた。地下収蔵庫は封印されていたが、美術館職員は難波の精華小学校に置かれた仮事務所において美術館は管理下になかったが、奇跡的に三階倉庫に置かれたコンテナは無事であった。
- (16) 『婚礼道具諸器形寸法書』寛政5年刊。
- (17) 八幡名物の一つであり室町時代の作と考えられている「碁盤蒔絵香合」(藤田美術館)は碁盤の形をした蒔絵香合である。
- (18) 明治維新で大名は、換金手段として、家臣に蒔絵などの道具類を分け与えたといわれる。それらが、明治初期に市場に流れ、海外に流失したといわれる。ウィリアム・スタージス・ビゲロー (1850-1926) は明治14年には日本の市場にはそれ以前のようにもはや蒔絵器物があふれていないと書いている。村形明子「日本の恩人ビゲロー略伝」『古美術』35 1971
- (19) "Japanese Lacquer" Being a paper read at the Kobe Women's Club on Twenty, March 11th, 1930と "Some Notes on Japanese Gold Lacquers" Being a lecture delivered before the Kokusai Bunka Shinkokai, Kyoto, on October 8th, 1938という私家版の小冊子がある。また "Lacquer of Tokugawa Period Shows Strong Influences of Wealth and Love of Luxury" という記事が1940年9月6日、13日、20日のJapan News Weekに、また "Japanese Art-Lacquers" という記事が1958年3月21日、22日、24日のThe Mainichiに掲載されている。
- (20) Basil Hall Chamberlain はイギリスの日本研究家。"Things Japanese" は1890年に初版が刊行されているが、ここでは当該の箇所を『日本事物誌』(東洋文庫 高梨健吉訳)から引用した。
- (21) ここではカザールの記述に該当する部分を高梨健吉訳『日本事物誌』平凡社東洋文庫、1969の翻訳を引用した。
- (22) Harold Müllerの死後書籍はチューリッヒにあるリートベルク美術館に寄贈されたといわれているが確認できていない。
- (23) 新村出「京都南蛮寺荒廃考」『史林』第三卷第三号 1918年7月、小林太市郎『支那と仏蘭西美術工芸』弘文堂書房 1937 山田智三郎『十七・八世紀に於ける欧州美術と東亜の影響』アトリエ社 1942
- (24) 吉村元雄「江戸時代輸出漆器基礎資料集1」『人文研究』26 関西学院大学人文学会 1976年6月ほか。
- (25) 『在外日本の至宝10工芸』毎日新聞社刊 1978年
- (26) 'Their scarcity intensified the enthusiasm they provoked in Europe, and during the early 18th century a few famous princely collectors—with madam de pompadour in the leading role—invested fabulous sums in their "Lacquer Cabinets", those small museums gaudily done up in Rococo style.' (以上原文)
- (27) 'The superiority Japanese manufactures over the Chinese had even then been recognized for some time: in 1699 already the purchasing order of the Dutch Company for various pieces of furniture specified that "none of the wares are to be sent but what are lacquered in Japan."'
- (28) 'The originators of these imitations are said to have been four brothers Martin of Paris, who started out as coach-painters but invented a varnish of hitherto unattained brilliance and applied it to golden designs in Chinese manner. In 1730 letters-patent were granted to them for a monopoly to make "toutessortés" ouvrages en relief de la Chine et du Japon," and the "Vernis Matin" became so famous that even Voltaire

mentioned them in his *Nadine* and elsewhere. With the next generation a rapid decline set in, and similar inferior vernis became more general, until there was a change in taste with the 19th century.’ (以上原文)

- (29) 元和3年(1617)堺にいたウィリアム・アダムスが平戸のリチャードウィッカムにあてた書簡、に“your incro of medicine box”という記載が印籠である可能性が指摘されている。
- (30) エフルッシがマリー・アントワネットの小箱について同書に書いていることは、学生時代に吉村元雄先生からご教示を受けた。Charles Ephrussi (1849-1905)はロシア、オデッサ生まれのユダヤ人実業家で富豪。パリに住み、ガゼット・デ・ボザールの主筆をつとめ印象派のパトロン、美術品コレクターとして知られる。近年その末裔であるエドモンド・ドゥ・ヴァールが、シャルルの購入した根付のコレクションの流転について書いた2010年『琥珀の眼の兎』が出版され、イギリスで話題になった。
- (31) “Le Lacques Japonais au Trocadéro”, Ephrussi, Charles, *Gazett des Beaux-Art*, decembre 1878, pp.954-969
Ephrussiには *Inventaire de la collection, De la Reine Marie-Antoinette* という著作もある。
- (32) 土井久美子「1878年パリ万国博覧会に出品された日本の漆工」『万国博覧会野美術』2004-5
- (33) Samuel Bing (1838-1905), Philippe Burty (1830-1890)
- (34) 前田正名(1850-1921)は明治政府の官僚。
- (35) エフルッシの蒔絵コレクションは、フィリップ・シシエルから購入したものも含まれる。
- (36) “Bric A Brac”はがらくたとか骨董という意味で、このコラムは室内装飾で、暖炉の上に飾る様々な装飾品を取り扱った連載である。
- (37) 米国ではボルティモアの富豪ウォルターズが、そしてボストンのウィリアム・スタージェス・ビゲローがこの頃、日本の蒔絵小品を蒐集して築いた。
- (38) Committeeとして、U.A. Casal, President, H. Maxwell, Vice-President, R.S. Hegener, Secretary-Treasurer, F. M. Jonas, Corresponding-Secretary for Japan, H. C. Egloff-Librarian. Membersとして Arata Abe, C. B. Bernard, A. Gasco, A. Hauchecorne, H. J. Griffiths, C. C. Hedrick, C. S. Lechner, W. H. de Roosの名が記される。別に塩屋のカザール邸で開かれた日本愛好家によるカザール邸での集合写真がある。(図10)
※※写真のタイトルと参加人物は以下のとおりである。
Annual General Meeting, held in the Garden of U.A.Casal, Esq., at Shioya, on Wednesday, May 5th, 1937
前列左より C. Odaka, Captain Sawada, H. G. Evans, L. J. Nuzum, K. Kikuti, H. Y. Irwine, G. Katuda, W. H. de Roos, S. Sawada, D. M. Young, V. B. Wilson.
後列左より J. F. James, K. Hori, S. Hirobayashi, K. Nisiwaki, S. D. Clay, U.A. Casal, P. M. Depeyre, M. Requien, P. de Vries, Y. Wakabayashi, Oscar Carreira, S. Nakase, S. Hatiuma, E. Suzuki
- (39) 「明治漆工芸の基礎研究—文献資料と在外作品の比較検討を通して様式変遷の一端を探る」『鹿児島美術財団年報』別冊25 428～440頁、2007。カーン夫人はユダヤ人の富豪で、エフルッシ同様蒔絵コレクターだった。
- (40) 起立工商会社のパリ支店の閉鎖は1889年である。その後の欧米の市場では日本美術にもオークションシステムが導入され、より高価で希少な美術品が取り扱われるようになる。

表1 カザールコレクション概要

ROUGH LIST OF LACQUERS----- COLLECTION U.A. CASAL

Mostly Gold Lacquers (or black with gold), but all other techniques, including carved lacquers, are represented in several of the groups. What might be called Household objects are Daimyo gold-lacquers.

Items :

- 2 very large gold cabinets
- 4 shelf cabinets for tea-ceremony etc.
- 5 lecterns
- 1 miniature Mikoshi (portable shrine)
- 20 panels and lacquer paintings
- 1 marriage set comprising 54 pieces
- 1 do do 15 "
- 10 Hitsu and kai-oke (deep covered containers for rice, shell-game etc.)
- 44 sage jû (complete picnic outfits)
- 18 jûbako (nests of food-boxes, some with stands)
- 6 ozen (food-tables)
- 5 mirror stands
- 2 haguro bowls (for water)
- 6 hasami-bako or similar "trunks"
- 1 set horse trappings: saddle, stirrups, cloth, reins etc.
- 2 sets do do do plus caparisons, horse-masks etc.
- 2 sets saddle and stirrups
- 7 single saddles
- 6 jingasa (warrior hats)
- 4 quivers
- 6 katanakake (sword racks)
- 4 large lacquer screens
- 7 small screens for writing table, tea-ceremony etc.
- 57 various stands for incense, food, ceremonial caps etc.
- 7 braziers, including 2 large Daimyo hibachi
- 12 tabakobon (smoking outfits), mostly cabinets
- 15 sets of writing tables and writing boxes (bundai-suzuri)
- 26 sets of document box and writing box (ryoshi-bunko)
- 4 single writing tables (bundai)
- 2 document boxes (bunko)
- 151 writing boxes (suzuri-bako), from pocket size to oversize
- 44 fubako (letterboxes), several in pairs
- 49 tebako (handyboxes), large, some with internal trays
- 54 boxes of various sizes and shapes, some with internal trays
- 47 small cabinets, chests of drawers etc.
- 148 kobako (small boxes) of sundry shapes, some with internal trays and boxes
- 326 kogo (incense boxes) , all varieties
- 19 koro (incense burners), including 2 complete sets for incense game
- 28 chabako, boxes for tea utensils, some with trays, some with complete outfit for tea ceremony
- 66 boxes for candies, small dumplings etc.
- 40 small toilet boxes, tablets for rouge etc.
- 54 natsume (tea-caddies for ceremony)
- 9 complete ko-awase sets for incense game
- 7 tubes for "joss sticks"
- 7 fans, war fans etc.
- 121 trays, various shapes and sizes, some with feet, in pairs etc.
- 7 dishes for food offering etc.
- 12 sets of plates for sweets etc. (67 pieces)
- 24 sundry drinking cups, water bowls and similar objects
- 101 individual saké cups, incl. 4 very large ones
- 70 sets of saké cups (2 to 20 per set), 257 pieces
- 16 sets of ceremonial stand with sets of saké cups (50pos.)

21 saké bottles including figure shapes
 16 saké jugs, pourers, kettles etc. some in pairs
 19 assorted tobacco pouches, some with pipe-sheath to match
 272 pipe- sheaths (tsutsu)
 590 inrô (medicine boxes), incl. a few non-lacquer ones
 26 snuff bottles " " " "
 24 yatate (brush and ink holders), lacquer only
 10 writing brushes
 5 pillows, or which 2 in pairs, 2 with incense-burning outfit (kyara-
 makura)
 7 musical instruments
 2 sets of games (checkers)
 2 bird cages
 11 "Sceptres" (nyoi)
 6 pocket shrines
 181 single combs
 96 sets of comb and kôgai (pin), some of more than 2 pieces
 41 hina-dôgu, miniature objects for the doll-festival
 136 varia: figures, masks, vases, brush-holders, tea-spoons, powder-flakes,
 towel-racks, wall ornaments, decorated eggshells etc.etc.

 3156 items, or thereabouts, comprising approximately 3700 pieces
 =====

PLUS : Some 700 NETSUKE of sundry materials, many of lacquers) to go
 ALSO : Several hundred OJIME (beads) of various materials,) onto the
 including lacquer and precious metals) cords of Inrô

 EXTRACTS from a few letters commenting on Collection:-

Mr. Kamezaburo OZAWA, Osaka, considered "the" authority on Oriental Art :
 -"When I visited your private museum...I was certainly surprised not only by
 its extent, but particularly also by your discrimination taste and very high
 quality of your objects...Your collection seems to be quite outstanding.

Mr.S.NAKANISHI, longtime manager of Yamanaka & Co., Kyoto:-
 "During the several visits to your gallery at home I have been constantly
 surprised by the very high average quality of your objects... Your collection
 is undoubtedly the best lacquer collection everywhere, and fit to form part
 of any high-class museum."

Mr.S.MOCHIZUKI, Director of the Osaka city Museum of Fine Arts: -
 "The writer wishes to assure you that in his opinion, as well as in that of
 Messrs. Maeda and Ueda of this museum, your collection of Japanese art-
 lacquers is undoubtedly the most comprehensive and complete in existence. At
 the same time it contains only objects of the highest grade and best taste,
 with a great many of such unique character as to make them perfect
 treasures."

Mr. H. A. GRAVES, former British Consul at Kobe (now Ambassador), after a
 visit to the Victoria & Albert Museum, London, and a talk with "the Head of
 the lacquer etc. section", wrote:- "He knew your collection by name and said
 that the museum had nothing to compare with it. This is very obvious as
 soon as you see it."

P.S : Prof. Dr. Otto Kümmel of Berlin, many years ago, on a busy trip to
 Japan, "could just spare an hour" to see my collection, having to be back in
 Kyoto for lunch. He arrived at about 10 a.m., had lunch with me, had dinner
 with me, and left by the very last train. The rest of the time, some 10
 hours, he spent in my museum. He regretted that he could not come once more.

表2-1 カザールが自ら編集した著作物一覧

		Pages
Foreword	Summer 1950	4
The <u>Abacus</u>	March 1947	4
"	revised July 1950	6
<u>Acupuncture, Cauteury and Massage</u>	March 1947	7
"	revised July 1950	11
"	final March 1957	12
The <u>Age of People and its Meaning</u>	March 1947	18
"	revised Octob. 1961	14
<u>Archery in Old Japan</u>	June 1943	31
The <u>lore of Archats and Immortals in the Far East</u>	revised January 51	149
Random <u>Reflections on Japanese Art and Applied Art:</u>	March August 47	6
1. <u>Historical Aspects in General I</u>	undated (2 copiee)	13
2. " " " " II		13
3. <u>Japanese Architecture</u>		15
4. <u>Paintings and Prints</u>		16
5. <u>Japanese Sculpture and Castings</u>		14
6. <u>Japanese Art Lacquers</u>		16
7. <u>Japanese Ceramics - Japanese Textiles</u>		18
8. <u>Arms and Armour of Japan</u>		17
9. <u>Minor Arts and Applied Arts</u>		18
10. <u>Symbolism and Folk-Lore as Art Themes</u>		20
The <u>Daily Bath</u>	July 1946	14
"	revised July 1950	21
"	final Dec. 1956	21
<u>Birds and their Symbolism</u>	April/May 1943	30
<u>Lake Biwa in Art and Lore</u>	revised Dec. 1950	1942
"	revised 1946	1946
"	final 1957	1957
<u>Old Bridges</u>	Sept. 1942	13
<u>Bridges of Old Japan</u>	revised Aug. 1950	27
<u>Chopsticks</u>	final April 1957	27
"	1942	9
"	revised Sept. 1948	10
"	final March 1957	12
The <u>Symbolism of Colours in the Far East</u>	July 1942	32
<u>Combs in Japan (see: Die Mystische Rolle des Kammes...)</u>	revised Sept. 1950	16
<u>Cosmetics and Teeth-Blacking</u>	July 1946	18
"	revised July 1950	18
"	revised July 1950	12
"	final July 1956	13

The <u>Oriental Compass</u>	Aug. 1957	12
<u>Crow, Raven and Magpie</u>	undated	1
The <u>Votive Ema of Japan</u>	July 1946	
"	revised Nov. 1948	9
<u>Ema</u>	Nov. 1948	
"	revised Aug. 1950	13
The <u>Ema</u>	Aug. 1950	10
<u>English as she is Japped</u>	undated	16
<u>Fuji-San</u>	Aug. 1942	
"	revised Sept. 1946	
"	2nd rev. Aug. 1950	27
"	final Aug. 1961	20
The <u>Goblin Fox and Badger and other Witch Animals</u>	Feb./March 1943	
"	revised July 1950	69
"	final Apr. 1938	63
<u>Go Sekku - The Five festival of Japan New Year</u>	Jan. 1938	
"	revised Dec. 1948	56
<u>Go Sekku - The Five festival of Japan New Year</u>	June 1950	170
The <u>Girls' Festival</u>		
The <u>Boys' Festival</u>		
The <u>Star Festival</u>		
The <u>Chrysanthemum Festival</u>		
<u>Conclusion</u>		
<u>Hachiman, God of War</u>	Mar. 1953	19
<u>Inari-Sama, the Japanese Rice-Diety and other Crop-Divinities</u>	May/June 1948	44
<u>Incese (see "Weihrrauch")</u>	Aug. 1942	
"	rvised April 1949	
"	2nd rev. Jan. 1951	30
"	March 1953	20
"	final April 1960	26
"	Aug. 1947	60
<u>Jewels and Stones in Oriental Lore (Alterations only)</u>		21-9, 22, 55'
<u>Die mystische Rolle des Kammes in Mythologie und Aberglauben Japans (see "Combs in Japan")</u>	Sept. 1963	11
The <u>Kappa</u>	May 1947	6
"	revised 1950	9
"	2nd rev. July 1956	8
"	final Sept. 1959	16
The <u>Kirin</u>	March 1953	6
The <u>Saintly Kobo Daishi in Popular Lore</u>	Autumn 1954	43
<u>Kompira-San</u>	undated	20
The <u>Healing Waters of Kusatsu</u>	June 1944	13
"	revised Sept. 1950	

Japanese Gold Lacquers				
Lecture to Hechima Club	May 1951	21		
Japanese Art Lacquers	June 1956	18		
Lecture O.A.G. and Asiantic Society of Japan				
Japanese Art Lacquers	undated	11		
Left and Right	March 1953	3		
Some Notes on the Miko, the "Divine Girls" Oracles of Shinto	Winter 1961	15		
The Significance of the Monkey in the Far East	July/ Aug. 1946	39		
Some Remarks on Japanese Musical Instruments	Nov.46/Mar.48 (2 copies)	163+		
The Mysticism of Names in Japan	Autumn55 to Spring 1956(2copies)	178		
Some Introductory Remarks for Viewing a Collection of Netsuke	undated	46		
Some Introductory Remarks on Netsuke	"	6		
Ohara - An Ethnological Study on the Plain North of Kyoto	Autumn 1951 to Winter 1952 (2 copies)	87		
Ono no Komachi (see "Famous Women of Odd Japan" - Extract) copied	March 1951 July 1960	4		
O-Tafuku	Sept./Oct. 1942	11		
Paradise as "The Abode of the Blessed" in China and Japan	April 1947	29		
Phallicism	Spring 1952 (20 Books)	1039		
Pilgrimages and Excursions	Oct.1942	28		
The Peach of Longevity	revised Aug. 1950			
Pfiradich (see "Peach")	revised June 1949(2 copies)	13		
On the Habito of Making Presents in Japan	transl.mar./Apr.62	8		
Plants of the Far East - Their Lore and Symbolism	undated	3		
Some Notes on the Sakasuki and on the Role of Sake- Drinking in Japan	June/Oct. 1944	352		
The Seven Gods of Luck	rewritten Mar./May 1951			
" " " "	Autumn 1939	215		
" " " "	(Roughly of notes, footnotes, lists,etc.)	pages		
" " " "	June 1942			
Beans and the Setsubun Festival	revised Sept,1948	20		
" " " "	final May 1957	16		
" " " "	revised Sept,1949	13		
" " " "	rinal May 1951	22		
Shippo-The Seven Jewels	Nov. 1942			
The Sun, the Moon and the Stars in Chinese and Japanese Lore	Final Dec.1961	10		
	Aug./Sept. 1942	82		
	revised Dec.1950			

The Punishment of Susa -No O	Nov.1946			
" " " "	revised Feb.1951	30		
" " " "	final Sept.1961	29		
Tanabata- The Star Festival	Apr.1943			
Japanese Temple- Belles	revised June.1949	24		
" " " "	June 1942			
" " " "	revised June 1950	13		
" " " "	final Jan.1961	13		
The Tengu	March 1947			
	revised Oct.1948	22		
Tobacco	Dec.1942	25		
	revised Jan.1951			
Tobacco in Japan	final June 1959(2copies)	21		
Some Notes on the Tomo-e	June 1959(2 ")	9		
Towels	undated	8		
Ushi- no Toki mairi	March 1953	5		
Vehicles of Days Gone By	Oct.1942			
Water and its Inhabitants in Japanese Symbolism and Art	revised Sept.1950	23		
Ueber den Weihrauch in Japan (see "inocense")	Jan./Mar.1943			
Famous Women of Old Japan	revised Jan.1951	98		
" " " "	transl.Sept./Oct.1963	14		
(An Introduction)	Oct./Nov.1942	123		
The Yamabushi	revised Jan./Mar.1951	31		
	undated			
	Autumn 1959	36		

表 2-2 美術館で保管する刊行物一覧

Incense	Asiatic Society of Japan	1950
Far Eastern Monkey Lore	Sophia university	1956
The Doll Festival		1938
Japanese Art-lacquer	Schweizerische Gesellschaft der Freunde Ostasiatischer Kultur	1940
The Kappa	Transactions 8, Asiatic Society of Japan, 1962	1962
Acupuncture, Cautery and Massage in Japan		1962
Beans and the Setsubun Festival of Japan	s.n.,	1958
Some Remarks on Japanese Lacquer Sakazuki		1934
The Tengu	Occasional papers, Kansai Asiatic society	1957
The lore of the Japanese fan	Sophia university,	1960
The japanese Rice Deity and Other Crop Divinities	Ethnos 14	1949
The Saintly Kōbō Daishi in Popular Lore A.D. 774-835		1959
Some Notes on Japanese Gold Lacquers: Lecture Delivered Before the Kokusai Bunka Shinkokai, Kyoto, on Oct. 8th, 1938		1938
The Goblin Fox and Badger and Other Witch Animals of Japan		1959
Japanese Lacquer: Paper Read at the Kobe Women's Club, on March 11th, 1930		1930
Ecrits Divers Sur la Civilisation Japonaise		1956
Casal Ugo Alfonso (1888-1964) .: Dokumentensammlung].		1908
The Yamabushi	Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens,	1965 Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens 第 46 卷 卷
Japanische Lacke	H. Tschudy, Schweizerische Gesellschaft der Freunde Ostasiatischer Kultur	1942
Die sieben Glücksgötter: Shichifukujin	Harrassowitz, Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens 第 39 卷	1958
Hachiman: Der Kriegsgott Japans, Tokyo, Hamburg, Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1962. Komm. Harrssowitz, Wiesbaden	Deutsche gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens	1962 Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens
Der Phalluskult im alten Japan	s.n.	1960
Japanese Art Laquers	Monumenta Nipponica monographs 第 18 卷 卷 Sophia University, 1961	
In memoriam:U.A.Casal	Transactions of the Asiatic Society of Japan	1966 Asiatic Society of Japan

大阪市立美術館紀要 第十三号

平成二十五年三月三十一日 発行

編集発行 大阪市立美術館

印刷 株式会社NPCコーポレーション

Contents

Review

- Special Exhibition “Chinese Paintings and Calligraphies from the Hashimoto Collection” and Symposium “The Stage Created by Collector HASHIMOTO Sueyoshi”
YUMINO, Takayuki 3

Lecture

- My Grandfather HASHIMOTO Sueyoshi
HASHIMOTO, Taiitsu 9

Articles

- A Study of “*High Pines at Tianmu Mountain*” by Lan Ying : considering its contents and forms
NISHIO, Ayumu 21
- Xie Shichen’s “*The Immortal’s Palm on Mount Hua*” : Paintings of Famous Mountains and Travel Culture
UEMATSU, Mizuki 41
- Landscapes Painted by a Literati Flower Painter : Wu Changshuo “*Swirling Waterfall in Snowy Mountains*” in Hashimoto Collection
KURE, Motoyuki 57
- Symposium Record 73

Article

- Tethered Hawks Screens by Tamura Chokuō in the Osaka City Museum of Fine Arts
CHINEN, Satoru 85

Note

- Study of Mounted Fans Screen, Attributed to Tawaraya Sōtatsu (Private Collection)
OTAKE, Etsuko 105

Article

- U.A.Casal, The Collector of Japanese Gold Lacquers
DOI, Kumiko 1
-

BULLETIN

Osaka City Museum of Fine Arts